

「ムーミン」原作者の魂の変遷

中野 理恵

〈トーベ〉とは、あの〈ムーミン〉の原作者、フィンランドの画家・作家のトーベ・ヤンソンを指す。本作は彼女の恋愛と仕事を描いた劇映画である。

舞台は1944年、第二次世界大戦中のフィンランドのヘルシンキ。トーベの父ヴィクトルは国の基金を支給されるなど認められた彫刻家だったが、非常に厳格な人物で、市庁舎のフレスコ画を描くほどのトーベの能力に期待し、娘には絵画の道に進むことを望んでいた。そんな父の期待に沿うように、日々、トーベはキャンバスに向かい、絵画の道に精進し、時たま、筆を休めると、紙に鉛筆やペンでイラストを描く。それは長い顎のムーミンロールやスナフキンだった。だが、父からは「これが芸術か」と一蹴されてしまう。そんな様子を見て、母は常にトーベに優しく接してくれていたのだが、遂に両親と暮らす家を出ることを彼女は決意する。

一方で、トーベは、交際中の妻持ちの男性ジャーナリスト、アトスの新聞に時折、ヒトラーを風刺したイラストなど(ちなみに彼女はそれらにきちっと署名をしていたそうだ)を描き、好評を得ていた。そんなある日、ふたりでの食事中に、アトスから「自分の新聞で子ども向けに連載を始めないか」と声をかけられる。こうして、世界中にファンを獲得しているロングセラー、〈ムーミン〉シリーズが始まった。

そのような日々を送っていたある夕べ、トーベはパーティで女性演出家、ヴィヴィカ・バンドラーと出会う。ヴィヴィカには夫がいたが、ふたりはお互いに惹かれ合い、恋愛関係に発展する。それをアトスに告げるトーベ。嬉しそうにトーベが活き活きと語る〈初体験〉をじっと聞くアトス。信じられない光景だが、アトスにも妻がいるので、こ



©2020 Helsinki-filmi, all rights reserved

ちらのアタマが混乱しそうだ。天真爛漫なのか、自由奔放と言うか、お互いに寛容なのか…。サラリと描かれているので、決して不快ではないのだが。

ほどなくしてヴィヴィカはパリに向かう。そして帰国する日、再会を楽しみにして、駅で待つトーベの前に現れたのは、見知らぬ若い女性と楽しそうに語りながら歩くヴィヴィカだった。トーベの葛藤は続くのだが、彼女にも新しい恋愛が待っていた。生涯を通じてパートナーとなった女性トゥーリッキ・ピエティラである。後に彼女は〈ムーミン〉に登場するトゥーテッキのモデルになった。

フィンランドのみならず世界的に同性愛が認められていなかった時代に、トーベ・ヤンソンは自分の思いに忠実に生きた。それが一本の映画になり、多くの人に見られる時代になった。何とも言えず、愛らしいムーミンと頼りがいのあるスナフキンや、イジワルだけど憎めないミー。ほのぼのとした〈ムーミン〉の背景にあった原作者の魂の変遷がここにある！

《Cinema Information》

『TOVE/トーベ』

フィンランド・スウェーデン映画(103分) / 監督:
ザイダ・バリルット / ヒューマントラストシネマ有
楽町ほか全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。
(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。